

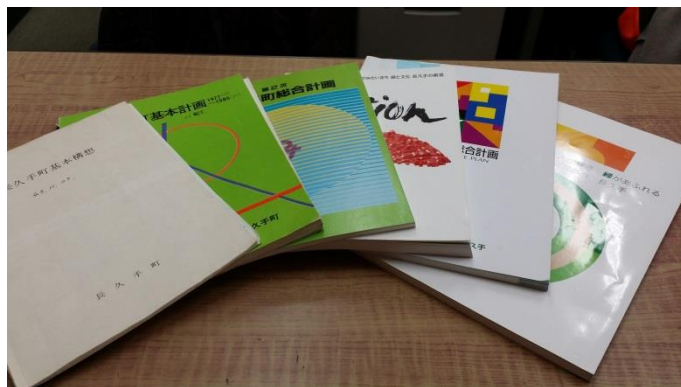
市役所では、隔週で市長、副市長、教育長、幹部職員による会議を開き、市の課題について話し合いを行っています。

平成25年12月5日に行われた幹部会議では、「1課につき1つの事業を市民のみなさんにお渡しする」ことについて話し合いが行われました。

ずっと謳われてきた“市民参加”

今日の幹部会議で、ある部長から「職員が“1課1事業”について、難しくて悩んでいます」との発言がありました。

そこで、私は来年度の予算は、「人づくり予算」と位置付けたいという話をしました。それはどういうことかと言いますと、長久手市は、昭和49年策定の「長久手町基本構想」に始まり、現在の「第5次長久手市総合計画」にいたるまで、“住民参加”を謳ってきました。「それじゃあ、住民参加でやってみよう」とやってみましたが、実は職員は、広報の手段として広報紙とホームページしかもっておらず、人集めも満足にできない状態でした。



“1課1事業”についても、各課からの提案は、施設等の草刈が多く、私は「市民にお願いするのは、“考える力”を使ってもらふことだ」とダメ出しをしました。市職員は、長い間、市役所という狭い中で仕事をしてきました。一方、市民のみなさんの中には、世界を相手にしてこられた方や、人との関係を大切にする仕事をされてきた方がたくさんおられます。そうした方々に集まっていただき、例えば「2050年問題解決研究会」なるものを立ち上げて良いと思うのです。

“1課1事業”の発想は、今、市役所が行っている仕事を止めるのではなく、市民のみなさんにその役割を担ってもらふものです。「人づくり」は、2050年の誰も経験したことのない超高齢化社会を見据えての「役割づくり」「職員と市民が共に育つ」ための取組みです。

「職員が悩んでいる」と聞きましたが、私は「悩む」のは良いことだと思っています。職員はこれまで、あまり考えることをしてこなかったからです。

今は時代が変わる過渡期

日本で、既に人口が減少していたり、高齢化が進んだりしているまちは、悩んで、考え、先に進んでいます。近隣でも尾張旭市の旭台地区や瀬戸市の山口地区などは、このあたりの先進地で、素晴らしい取組みが行われています。

今年7月から「地域担当職員」を2名配置しましたが、彼らも悩んでいます。地域担当職員が、地域に出て「ぜひ、〇〇に参加してください」と呼びかけを行っていますが、「忙しいから…」「興味がないなあ」などのご意見をいただき、地域担当職員からは「難しい…」と聞いています。

人間関係を作る前に、いきなり仕事の話をするれば、それは誰でも断られます。まずは、ひたすら相手の話を聞くことから始めても良いと思います。

過去50年間で、役所は市民のみなさんにとって「競争相手なき委託業者」になってしまいました。「面倒なことは、役所がやっておいて」という時代を過ごしてきたのです。

今、過去50年の役所と市民の有り方が変わろうとしています。誰もやってこなかったことをやろうとしています。今、市がやろうとしていることは、ノウハウがなく、なかなか理解してもらえません。今は、時代が変わる過渡期で悩み考える時期ですから、職員はしんどいと思います。しかし、そのしんどさは、ずっと続くものではありません。

先日行われた校区ごとの防災訓練では、参加者が少ないと予想されていた長久手小学校区と東小学校区で、予想を超える多くの方にご参加をいただきました。反対に名古屋に近い地域の校区は、思ったほど参加者が集まりませんでした。訓練を通し、そのほかの課題もたくさん見つかりました。こうした活動を通し、市民のみなさんと職員と一緒に悩み、考えることで、このまちは変わっていくことができると思います。



防災訓練の日、三ヶ峯自治会では、近隣の事業所等とも協力し、独自に炊き出し訓練を行われました。